<公開講演会報告> 高齢者・障害者ともに生きる社会の実現に向け

<table>
<thead>
<tr>
<th>著者</th>
<th>坪井 良子</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>著者別名</td>
<td>あかひで よしこ</td>
</tr>
<tr>
<td>雑誌名</td>
<td>筑波大学リハビリテーション研究</td>
</tr>
<tr>
<td>巻</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>号</td>
<td>62-63</td>
</tr>
<tr>
<td>ページ</td>
<td>1994-03-31</td>
</tr>
<tr>
<td>発行年</td>
<td>1994年3月31日</td>
</tr>
<tr>
<td>URL</td>
<td><a href="http://hdl.handle.net/2241/10907">http://hdl.handle.net/2241/10907</a></td>
</tr>
</tbody>
</table>
【公開講演会報告】

高齢者・障害者と“ともに生きる社会”の実現に向けて

坪井 良子

「もし私が障害者でなかったら、ここまでやってこられただろうか。高齢者・障害者はあなたの問題です」と永井昌夫先生は結ばれた。

第2回筑波大学公開講演会・シンポジウムは、秋空が高く澄み渡った快晴の平成5年11月6日午後2時から5時過ぎまで、筑波大学津浦広文教授の司会のもとに4名の講師と熟心な聴衆120余名を集めてエーディィ別館において開催された。

講師は、国立精神・神経科学研究所の幸永井昌夫先生「社会と障害者のバタナーシップ」について、筑波大学池田由紀江教授「障害の生態・地域環境」、筑波大学河内清助教授「視覚障害者の自立と地域社会」、筑波大学中野吉雄教授「障害をもつアジア人に関する法律とその施行をめぐって」と題して開かれた。

永井昌夫先生は、リハビリテーションとは、チャレンジする精神をおこさせることであり、周囲との不調和をなくすことであると述べられた。そして再びともに生活に戻るのではなく、新しく生きることであって、障害はレッスンであってリハビリテーションは学習過程であり、その目的は心理的自立をめざすものであると力強くおっしゃった。

障害者が社会の中に存在するには、日常生活動作をよくしてからではなく、初めから社会の中にいるべきであって、CUREよりはCAREを必要とし、生活の質が主眼である。したがって体験的なADLの授与とQOLのバランスを考えることである。障害者はその人の人生において、障害があってよかったということを受け、そして健康者に教えたり、愛したりしていく中で、ともに生む社会・パートナーシップを養っていくことが大切であると強調される。障害をもつ家族もともに障害を背負っているのであって、家族ごとの治療の必要性、むしろ、家族のはうご治療すべきであると訴えられた。

社会は障害者によって成り立ち、及ばぬところは社会から埋めていかなければならない。その際ギャップを最小にして、小社会がバランスよく機能していかなければならない。障害者に対しては同情ではなく共感していくことが必要である。そして誰もが生まれて「人生」、という病気になかったと。

社会全体の中でバランスを保ち、よきパートナーとしてリハビリテートしていかなければならない。リハビリテーションは時代や国運によって変化するので、障害者の権利を考える時、立場を変えて見ていくしか方法はないだろうと。

講師のうち永井昌夫先生と河内清助先生はご自身が障害をもっておられる。永井先生は、米国留学時に交通事故にあって顔面損傷を負われた。そしてリハビリテーションの先進国で、患者として指導を受け、その制度に接し、帰国した時は、わが国はリハビリテーションの黎明期であり、その進歩と共に歩み、先生ご自身が当時教育を開始して間もないコメディカル・スタッフの指導に尽力された。

シンポジウム当時は、車椅子に介護者が付き、時間中にも頻回な起立性低血圧のためファーラー位への体位変換や水分摂取、上肢の運動等をしていっしょに、その事自体が聴衆に大きなインパクトをあたえた。

池田由紀江先生は「障害乳幼児と家庭・地域環境」と題して、特に知的障害などの発達障害をもつ親への援助をとおり、その立場から問題を提起された。生まれてきたが子が障害をもっていると知られた親が、地域社会においてどのような障壁に遭遇しながら子供を育てているのかを明らかにし、それを取り除くための課題はなかっか。具体的には、0歳から関わっている事例（現在9歳）を中心に、障害児であることを診断された時点、乳幼児期、就学から現在にいたるまでの家庭や地域社会での障壁はどのようにあったかにつれて紹介された。障害児であると診断を告げられた時の冷静は、信じられないが38.2%、どうしたらよいかわからないが12.8%、希望感14.6%であり、直ぐに相談した場所は、親の会23.2%、児童相談所21.2%、保健所18.2%で、診断直後必要な援助は、早期療育相談30.0%、相談・情報提供機関23.4%であったという。

待望だった子供が、願っていたが子の姿とくち

自治医科大学看護短期大学

— 62 —
かった時、親もまた時に生きる意欲さえくなくてしま
うだろう。 inteligente 
やがて、そういうかわが子も、また親にもか
けがのない人生があるはずだと思うことからも出
ようになれば、再び生きる活力が流れる。生きる新たな目
標が生まれてくるだろう。再び子供が生まれて変化し
たことも質問に対して、親の視野が広がり人生観が変
わった 25.9%、夫婦の関係が緊密になった 16.1%、本
当の左が増えた 11.6%と人生観が変化し、もっと子を一
人の人格をもった人と認め、同等の人間としてともに
よりよく生きて行こう、と変化してきたことを話
された。

３人目の講師河内清彦先生は「視覚障害者の自立と
地域社会」として発言されました。先生は 12 歳で視力失
い、全盲になってからということを話され、目が見えな
いとどのような事、物理的な壁とは、文学の壁とは、
壁を取り除く努力もし、そして一番恐ろしいのは心の壁
であると話されました。目が見えなくても、それは暗闇の
世界に住んでいるわけでは決してない。明るさがなけ
れば、暗さもない。しかし、過去に見たという経験
があれば、外界の物事が触覚的・聴覚的な刺激と結び
付いて、外界を映像化してとえることが多いという。
日常生活を送るうえで、特に不便なことは、歩くこと
と文字の読み書きが苦労である。

目が見えないために、アパートが借りられないとか、
一緒に住むと土地の評価が下がるといった理由で、社
会の中にともにくらすことを困難にしている現状もあ
ると言われた。そして、地域社会で自立した生活を送
るためには、住民同志が相互に受け入れ、互いに力を合
わせて、心の壁を取り除く努力をすることが必要であ
ると指摘された。

最後に中野善隆先生は「障害をもつアメリカ人に関
する法律とその施行をめぐって」と題して次のように
話されました。

1990年7月26日「障害に基づく差別の明確かつ包
括的な禁止を確立するための法律」略称 Americans
with Disabilities Act of 1990（ADA）は障害をもつ
人々に、機会の平等、完全な参加、自立生活、経済的
自給自足を保障するという目的のもとに法律が成立し
た。

ADA は人権を高らかにうたいあげ、アメリカで障
害者が出ている差別の状況を、法としてなくして
いこうという理念を掲げており、障害をもつすべての
男性・女性・子供がこれまで閉ざされてきた平等・独
立・自由の輝く新しい時代に進んでいこうとするもの
である。この法律は障害を人々の平等に向け、包括
的な宣言として、世界で初めてものであり、アメリカ
カ社会だけでなく、日本をはじめ世界的な関心を集め
ている。

わが国では都道府県がそれぞれ障害者の基準を設
けようとしているが、一貫性に乏しいという拠点があ
る。一日でも早く国としてのレベルを発していかなけ
ればならない。日本での ADA の成立の予図は立たな
いが、それかもしれませんが考えられるより早く出来る
かもしれない。

出席者の中には視覚障害をもつ人や高齢者も多くい
た。また、医療・教育・福祉の分野で活躍している方々
も多かった。日常の中で障害者に接しながら、その人
の人格をどこまで守れるか、また、どのように指導す
ることが望ましいかなど聴衆からの質問も活発に行われ
た。

しかし、なんといっても障害をもつ講師が生か
けてご自分の体調を整えながら、体位の変換、上肢
の運動と、自己のためよろは聴衆へのサービスを、きっ
とご自分のためなら 3 時間にも及ぶ講義は鈍かった
に違いないとさえ思われる時間を懸命に応えている
姿に、心から敬服し、深く感動した。と同時に聴衆に
大きなインパクトを与えたのに違いはない。また、介護
に当たっている方のときびきとした対応にもまた大きな
感動を感じた。先生の手となり、足となり、その助け
たるところの担い手として一致協力していくという素
晴らしい光景は実際に美しいものであった。

社会の中での情勢をみてみたならば、急激な変化はパ
ラスを失うことになる。社会の尺度と個人を保ち
つつ、相対する事の中から常に両方を考えていかなけ
ればならない。これらのことは、個人が日々のくらし
と適応し、心身のバランスを維持しながら健康に暮
らしていくことも通じる。

社会にはパラドックス的な相反することがしばしば
おきている。それらの両方がバランスよく歩まなければ
ならないこと、そして自分の周囲からでも誰かが風
が吹くような小さな変革を求め、努力していく必要
があると再認識した一日であった。さらに、なにより
も自分の中から変わってしまいかなければならない。そし
てともに歩む社会を自分自身の中に、周りにも作っ
ていくなければならない。なぜなら、私々すべて「障
害者」なのだから。